

東京大学卓越大学院トライアル 「海外研究拠点ネットワークを使っての院生のグループワークの支援」報告書

総合文化研究科 地域文化研究専攻 博士課程 三浦航太

東京大学卓越大学院トライアルと UTokyo LAINAC の支援の下、今回 11 月 9 日から 11 月 20 日までの日程で「Field Excursion to Oaxaca」、「Academic Tutoring Sessions」、「Research Presentations by UTokyo students at COLMEX」、「UTokyo-COLMEX-UNAM Student Meetings」の 4 つの活動を行った。

《Field Excursion to Oaxaca》

11 月 10 日から 13 日にかけて、COLMEX（エル・コレヒオ・デ・メヒコ大学院大学）の 3 名の学生とともに、メキシコシティの南東約 400km に位置するオアハカへのフィールドトリップを行った。私自身 2 度目のメキシコ訪問となったが、オアハカは初めての訪問である。オアハカでは、主にサントドミンゴ教会、オアハカ文化博物館、モンテ・アルバン遺跡などを訪問し、先住民、植民地化、独立、革命、現代へと至る重層的な文化、歴史を窺い知ることができた。また、オアハカの中心の広場では地元教職員組合による一部占拠を目にし、メキシコにおける社会運動の一端に触れる機会を得た。4 日間の中では 3 名の COLMEX の学生と研究、院生生活、メキシコ社会、メキシコ文化、日本との違いについて議論する時間を多く持つことができた。それが本フィールドトリップの中で最も貴重かつ有意義な時間であったと思われる。2017 年 9 月に発生したメキシコの地震の際の SNS を用いた支援活動に関する話や、私がフィールドとしているチリの事例との違いに関する議論は非常に興味深いものであった。2010 年のチリの地震の場合、主な用途は公式の被害情報の収集と拡散にあり、このためにチリで SNS が普及したと言われている。一方で 2017 年 9 月に発生したメキシコの地震ではコミュニティベースでの支援に SNS が用いられたとのことだった。SNS の日常的な用途の違いや SNS 普及段階により災害時における用途が異なることが伺える事例であり、社会運動における SNS を研究テーマの 1 つとしている私にとって比較研究の可能性を感じさせる興味深い議論であった。



左から「サントドミンゴ教会」、「モンテ・アルバン遺跡」、「オアハカ文化博物館」

《Academic Tutoring Sessions》

11月16日、COLMEX 国際研究センターにて、メキシコの社会運動を専門にされている Ilán Bizberg 教授と面談を行った。面談の目的は、博士進学以来関心を持っている社会運動における感情の分析に関して先生から意見をもらうこと、二国間の高等教育制度および学生運動の比較可能性について相談した上で私がフィールドとしているチリとメキシコを比較した場合について検討を行うことの2点である。まず前者については、運動初期段階における感情とそれ以後の段階における感情を分けて考える必要性についてメキシコの事例を踏まえながら意見を頂いた。後者については、メキシコとチリの入試制度や大学制度の違いから、共通の 이슈 を作ることの困難さや連帯の程度に違いが出ているのではないかということについて議論を行うことができた。もっぱら運動から制度という方向性で研究を行ってきた私にとって、制度が運動を規定するという点について改めて見直すことができ、かつチリの学生運動についても新しい研究視点を獲得することができた非常に有意義な時間であった。



Ilán Bizberg 教授（中央）と COLMEX の国際研究センターにて

《Research Presentations by UTokyo students at COLMEX》

同じく11月16日、COLMEX 図書館において自身の研究に関する発表を行った。題目は、「Intento de comparación de la política de “gratuidad” de educación superior entre Chile y Japón（日本とチリにおける高等教育無償化政策の比較の試み）」である。このテーマはそもそもチリと日本は比較可能なのかという点から検討が必要であるため、この点について COLMEX の学生から数多くコメントをもらうことを目標とした。主として、どのような点で比較する意義があるのか、比較から明らかにしたい問いは何か、どのように比較を行い得るのか、などの点を発表した。特に私が専門としている社会運動研究の分析枠組みでは分析が難しいと考えられるため、多様なアクターから構成される組織・制度フィールドや社会規範という概念を用いることの可能性について提案を行った。COLMEX の学生からは、社会規範と世論の相違、チリと日本の教育格差の相違、高等教育の世界的なマクロ構造の変化、日本の政治アクターの動きなど

の点について質問やコメントが出た。本テーマについては、2018年5月の Latin American Studies Association の大会において発表する予定であり、今回得られた分析概念や枠組みの妥当性に関するコメントを基に研究を進めていきたいと考えている。



《UTokyo-COLMEX Student Meetings》

11月17日、COLMEXにおいてアジア・アフリカ研究センターの学生と交流活動を実施した。COLMEXからは日本研究の学生が集まったため、COLMEXの学生の研究関心や計画について議論する時間が多くなった。私自身チリの学生運動を研究する中で指摘されることがあるが、チリの研究者の間で当然視されている分析視角や着目すべき対象をいい意味でも悪い意味でも共有していないケースがある。今回COLMEXの学生と話す中でも、なるほど外から日本を眺めるという時にそのような点に着目し関心を持つのかといった驚きを感じた。特に、日本の漫画を研究している学生と話をした際に、漫画から日本社会の一表象を読み解くのに私たちが適当と思う漫画と彼らが関心を持ち適当と思う漫画にズレがある、つまり、何をもって日本社会的と感じるのかに内と外ではズレが存在することを改めて認識させられた。私が研究しているチリの学生運動に関しても、目標実現のために学生リーダーたちが政治家に転身し政治構造の中に入り込んでいくことの有効性といった点についても話し合う機会を得た。来年度は「チリ・メキシコ・日本フォーラム」が実施される予定である。そのフォーラムに向けて、今回話し合った研究関心や研究計画を実際の研究に繋げ、研究成果として具現化していくためにも、今回の機会は非常に貴重なものであり第一歩となったと思われる。

COLMEX で開催された Student Meeting での自己紹介



《さいごに》

本活動の実施にあたり、東京大学卓越大学院トライアル（地域文化研究専攻）及び UTokyo LAINAC からご支援を賜りました。心からお礼申し上げます。